

□海外文献紹介□

炎症性腸疾患手術における回腸直腸吻合術の現状

Current status of ileorectal anastomosis for inflammatory bowel disease: Khubchandani IT, et al (Dis Colon Rectum 32: 400-403, 1989)

約10年前、著者らは炎症性腸疾患(以下IBDと略す)の大腸全摘術後の回腸直腸吻合術について報告した。その後は、Kockらによる回腸瘻造設術がIBD患者の手術に、一般的に行われるようになった。今回、これらの術式を見直した。と言うのも、この施設では、肛門周囲に強い化膿性病変や癌の合併がなけれ

ばできる限り直腸を温存する手術を行ってきたからである。対象は1959～1986年の間に、この施設で手術した210例のIBD患者。110例(66%)に回腸直腸吻合術が施行された。他の100例は部分切除などであった。回腸直腸吻合術を行った110例の内訳は潰瘍性大腸炎49例、Crohn病61例で、このうち不成功例は、両疾患合わせて11例(10%)のみであった。しかもそのうちの約半数の5例は残存直腸に発生した悪性腫瘍によるものだったが、3例が早期癌で発見されている。成功例99例のうち、半数以上の53例は、二期的手術であった。術死はなく失敗率も低く、定期的な残存直腸の検

査を続けていけば、癌の早期発見も可能であった。IBDの再燃による失敗例は6例であったが、吻合不全の予測は直腸の伸展性を注意深く検査することが、経験上重要と思われ、特に適切なマノメトリー検査による適応の可否の決定が必要である。当施設での経験から、IBD症例における手術治療においては、多くの症例で回腸直腸吻合が可能で、患者のquality of lifeに深く関与するものであり、現在においても重要な手術法と考えられる。

(愛知県がんセンター消化器内科

白井正人 抄)